

## 江戸の公事宿と村 ―下総屋文蔵と下総国豊田郡加養村稲葉家の事例から―

千葉 真由美

### *Peasant Inns in Edo and Villages in the Early Modern Period*

Mayumi Chiba

#### はじめに

茨城大学図書館所蔵稲葉家文書は、近世の下総国豊田郡加養村（現下妻市）で名主を務めた稲葉家で保管された、加養村の村方史料や稲葉家の地主ほか諸経営に関わる、近世（近代を中心とした）文書群である<sup>(1)</sup>。稲葉家は近世後期に鬼怒川東岸、小貝川西岸の台地へ引水する江連用水の再興運動の中心的役割を果たした家であるため、本文書群には用水再興に関わる史料も含まれる。また醤油醸造・販売、穀物売買等を営んでいた関係からか、反物、紙、糸ほか多くの品物の領収証も残されており、江戸の諸商人とのつながりも多かったことが考えられる。

筆者は別稿において、本文書群中に稲葉家が江戸の公事宿下総屋文蔵を通じて、江戸の印判師森田與七製作の印を購入していたことを紹介した<sup>(2)</sup>。江戸とのつながりは当該地域における流通や消費のあり方としても注目できる点である。本稿では下総屋文蔵と加養村稲葉家の関係に着目し、村と江戸そして支配をつなぐ役割を有する公事宿の

存在について検討する。

#### 一 江戸の公事宿「下総屋文蔵」

江戸の公事宿については、江戸町奉行所市中取締掛によって天保期以降編纂が続けられた、江戸市中の行政史料集である『市中取締類集』「旅人宿調之部」に名前が掲載されている<sup>(3)</sup>。「元三組江戸宿名前」の項に「元馬喰町小伝馬町組旅人宿」九八軒、「元八拾貳軒組百姓宿」七七軒、「元三拾軒組百姓宿」二六軒、合計二〇一軒を数えることができる。この記載から判断できるように、江戸の公事宿は旅人宿と百姓宿とに大別でき、両者をふくめて江戸宿とも称したようであるが<sup>(4)</sup>、史料上では「郷宿」と記されることもある。旅人宿は馬喰町近辺に集中しており、江戸中期以降は約一〇〇人前後であったとされ、また一般の旅客をも扱った。一方の百姓宿には八十二軒組・三十軒組がある。いずれもそれぞれ株仲間を形成していた。

「旅人宿調之部」のうち、天保一四年（一八四三）正月付、馬喰町二丁目庄兵衛と小伝馬町三丁目甚八が提出した書上から、元馬喰町小伝馬町組旅人宿の一覧を示したものが表1である。九八軒の旅人宿のうち半数以上の五三軒が馬喰町にあり、旅人宿が馬喰町に集中していたことがわかる。馬喰町一丁目の旅人宿一六軒を一覧にしたものが表2で、このうちの二軒に下総屋文蔵が記載されている（No.16）。

表2 馬喰町壺丁目の旅人宿一覧

No.	所在地	軒数
1	甚兵衛店	竹屋藤助
2	伊右衛門店	大松屋佐兵衛
3	同店	足茂屋林蔵
4	同店	堺屋又次郎
5	同店	奥州屋武兵衛
6	同店	越後屋勘五郎
7	藤兵衛店	相模屋喜兵衛
8	家主	羽生屋藤兵衛
9	喜兵衛店	苅豆屋茂右衛門
10	家主	伏見屋庄左衛門
11	義兵衛店	下野屋伊助
12	徳右衛門店	上州屋弥兵衛
13	家主	井筒屋嘉七
14	家主	京屋弥助
15	庄左衛門店	岩城屋権兵衛
16	家主	下総屋文蔵

＊『市中取締類集』「旅人宿調之部」より作成

表1 元馬喰町小伝馬町組旅人宿一覧

No.	所在地	軒数
1	小伝馬町三丁目	7
2	馬喰町壺丁目	16
3	馬喰町貳丁目	19
4	馬喰町三丁目	18
5	馬喰町四丁目	3
6	小伝馬町貳丁目	1
7	橋本町四丁目	3
8	神田富山町貳丁目	1
9	平永町	1
10	松嶋町	1
11	大伝馬町貳丁目	1
12	本石町四丁目	2
13	本石町貳丁目	1
14	箱崎町	1
15	小網町三丁目	2
16	小網町貳丁目	2
17	長谷川町	1
18	富沢町	1
19	本所相生町三丁目	1
20	浅草材木町	1
21	聖天町	1
22	下谷茅町貳丁目	1
23	本郷壺丁目	1
24	大門通弥兵衛町	1
25	本銀町四丁目	1
26	本銀町壺丁目	1
27	本町壺丁目	1
28	小船町壺丁目	1
29	元四日市町	1
30	堀江町三丁目	2
31	霊岸嶋東湊町	1
32	霊岸嶋請負地	1
33	霊岸嶋埋立地	1
34	通壺丁目	1
合計		98

＊『市中取締類集』「旅人宿調之部」より作成

## 二 公事宿と村の争論

公事宿は訴訟のために地方から出てきた者の宿泊所であるが、宿泊だけではなく訴訟に関するさまざまな仕事を請け負う存在であった。ここでは、嘉永期（一八四八―一八五三）の加養村での名主役をめぐる争論に関わった、下総屋文蔵の活動と稲葉家の関係を示す史料を紹介する。

加養村の名主をめぐる争論は、嘉永四年（一八五一）三月、百姓代喜伝次ほか四名が支配役所である下野国足利郡大前村（現栃木県足利市）に置かれた郡方役所へ訴えたことに端を発した。加養村は旗本七人の支配下にあり、稲葉家は旗本土井氏の知行所名主でもあった。名主虎之助は祖父儀右衛門・父吉左衛門の跡を継ぎ、前年十一月に名主役を命じられたのだが、ほどなくして訴訟が起こされたのである。百姓代喜伝次らが訴えを起こした翌月には、名主虎之助も相手方を訴えている。そして郡方役所から関係者を召喚する差紙が届けられた。次

の史料1は嘉永四年の御用留に記載された召喚状の写である。

〔史料1〕

○嘉永四亥年四月廿三日、下総屋飛脚を以書面之御用状参り申候  
郡方役所

下総国豊田郡

加養村 名主

組頭共江

賃飛脚

相尋儀有之間、左之者とも村役人差添、来ル廿六日出府着相届  
候様可申渡、若不参ニおゐてハ可為越度もの也

四月廿二日 郡方役所印

加養村 名主

組頭共江

吉兵衛

熊之助

当亥四月廿三日、御屋敷様方左之御用状、下総屋飛脚ヲ以参り  
候二付、惣左衛門呼寄直ニ相渡申候

郡方役所

下総国豊田郡

加養村

組頭 惣左衛門江(5)

四月二三日、加養村名主・組頭に対し、下総屋からの飛脚によって  
郡方役所の御用状が届けられた。尋ねることがあるとして三日後の  
二六日に吉兵衛・熊之助への出府を命じたものである。吉兵衛・熊之

江戸の公事宿と村 千葉

助は名主虎之助を訴えた中心人物である。なお郡方役所は、訴えに關  
わっていないかった組頭惣左衛門へも同様に御用状を渡したようであ  
る。これを受けて、惣左衛門も二五日に江戸へ出ている(6)。以上の  
ように、公事宿は訴訟に際し、まず村あるいは関係者に役所への召喚  
を命じた差紙を届けるといった業務を、関係役所から請け負っていた  
ことがわかる。

この後、虎之助ほか稲葉家の関係者も江戸へ出ることになり、下総  
屋に宿泊滞在していたと考えられる。一月になって、虎之助の父吉  
左衛門が呼び出されるという場面があった。次の史料2は下総屋から  
役所へ提出された願書である。

〔史料2〕

乍恐以書付奉申上候

御知行所

加養村

持高名主<sup>①</sup> 稲葉吉左衛門

右之者、今日御呼出しニ付召連可罷出候処、先達而中御訴奉申上  
候方以来病氣ニ而、尤前三日大分快方趣候処、尚又昨夜方発熱仕  
心外罷在奉恐入候へとも、押而も難罷出故相歎候間、無余儀此段  
御届奉申上、尤精々薬用仕、全快次第御届可奉申上候間、何卒以  
御慈悲當日御猶予被成下申上候様奉願上候、以上  
十一月五日

下総や

文蔵内

慶次郎

土井主計様  
御役所(7)

(\*傍線部は筆者、以下同)

吉左衛門が役所から呼び出されたが、訴訟以来病氣であったこと、三日前には大分快方に向かっていたが昨夜より発熱したため役所へ出ることは難しい（傍線部①）、治療をして全快次第出頭するとある（傍線部②）。下総屋文蔵方で雇われている慶次郎から役所へ出された出頭猶予願である。慶次郎は下総屋の下代であったのだろう。公事宿の雇人である下代は訴訟の時の実際の世話役である。出頭すべき本人に代わって、公事宿の下代が出頭猶予願を出すこともあった。なお吉左衛門の肩書きに「持高名主」とあるが、これは稲葉家が儀左衛門の代から有していた特権ともいえる立場であった。本稿では詳しくは触れないが、この争論は「持高名主」の是非をめぐる側面も有していた。

以上のような事務的ともいえる書面のやりとりだけではなく、公事宿は訴訟の進め方についての助言もしている。嘉永五年（一八五二）五月、名主虎之助は手鎖、宿預けを命じられた。そのためであろう、虎之助は八月に名主休役を願い出ている。争論は名主虎之助にとって不利な状況となっていたのである。九月、下総屋に滞在していた虎之助は祖父儀右衛門に次の書状を送り、状況を報告している。

### 〔史料3〕

花墨被下忝拝見仕候、愈其御地皆々様御安康ニ被受奉賀候、然者下拙儀当月廿日御呼出し被 仰聞候二者、諸向取計悪敷故、村方も及騒動ニ候趣を以、手鎖宿預被 仰付候儀、乍併弁之簾不取計江と申事ニも無之、何之無差別も只々右之御礼明を蒙り候儀、下拙儀も扱々残念ニ奉存候間、御遠中江成共駕籠訴致度、種々勘考仕、下総屋代慶次郎殿方坏と色々相談も仕候処、何方江越訴いたし候而も御屋敷様江御下りニ相成候間、左候へ者又々青木清五郎殿之御吟味ニ預り、却而宜敷も無之候間、大舟ニ乗り候心持ニ而

緩りといいたし居、又々御調受候節者、小前之ものも罷出候間、其時程様ニ付費候外者無之、青木氏ハ小前身方ニ御座候而、御調請候義ニ御座候間、右之手段外ハ無御座候哉と存候、夫とも御屋敷様御目附衆様強ク御座候得者宜敷候得共、柔弱之衆ニ而兎角青木ニ相任置候儀ニ御座候間、小前之もの相願候外訴外之御取調、村方混雑之手続柄御取調ニ預り、兎角依貞之御吟味ニ而右様之訳柄ニ成行申候、先者右之段申上度計ニ如此ニ御座候、以上

子九月廿九日

江戸馬喰町壺丁目

下総屋ニ而

虎之助

御隠居様

尚々

年末筆本宅へ別紙差上不申候間、宜敷被 仰上可被下候、以上（8）

「諸向取計悪敷」すなわち虎之助による村運営が悪いため村方騒動になったとされ、虎之助は手鎖、宿預けを命じられたのである（傍線部①）。「扱々残念ニ奉存候間、御遠中江成共駕籠訴致度、種々勘考仕」とあり、非常に残念であるから駕籠訴をしたいと考えており、下総屋下代の慶次郎と相談をしたとある（傍線部②）。役所の判断に対して虎之助は納得がいかず、また当時禁じられていた越訴、「駕籠訴」を考えるほど悔しい思いであったことがうかがえる。虎之助は公事宿とその後についての具体的な相談をした。しかしながら越訴をしたところで結局は「御屋敷様」すなわち支配役所である大前役所へ送られることになり、再度青木清五郎の吟味になるため、かえって好ましくないとこの話にもなっている（傍線部③）。そして次に調べを受ける際は小前百姓も呼ばれるだろう、青木氏は小前の味方であることを考え進



めるしか手段はない、といったことが述べられている(傍線部④)。また、支配役所の役人に対してはより辛辣なことも記している。目付衆が強気であれば良いものの、彼らは「柔弱之衆」すなわち弱気であるため、とにかく青木に任せるようなところがあるという(傍線部⑤)。こういった支配役所側の人物評価そして想定される対応については、公事宿からの情報によるところもあつただろう。

同年一二月には、再び百姓惣代らが名主を訴えており、名主虎之助そして稲葉家にとつても引き続き不安定な状況が続いていた。

### 三 公事宿と村のつながり

公事宿は訴訟以外の場面において、例えば領主から村々への廻状の通達や領主に代わつての村々への年貢金上納の督促なども請け負っていた。近世の支配体制において、領主と村をつなぐ役割を果たす存在であつたといえる。また百姓が江戸に滞在する際には、彼らの飲食代や人足飯料の授受を仲介することもあつたようである、諸商店からの領収証もある。さらには百姓と日常生活の面でもつながりを有していた。下総屋では稲葉家に関わる女性もたびたび宿泊させていたのだろう。縮緬の着物の準備ほか品々について記した、「下総屋内」にいる女性ゆなから稲葉みつへの手紙なども残されている(9)。

公事宿は「得意先」ともいえる村や家があり、毎年正月には年賀状が届けられていたようで、新暦が同封されることもあつた(写真1)<sup>(10)</sup>。欄外左下に「馬喰町一丁目下総屋文蔵」とある。暦だけではなく、時宜に応じて各種の刷物が届けられていたようで、嘉永六年(二八五三)のものとして、寺社奉行・町奉行・勘定奉行ほか幕府の役職および人名を書き上げた刷物が伝存している<sup>(11)</sup>。この刷物には

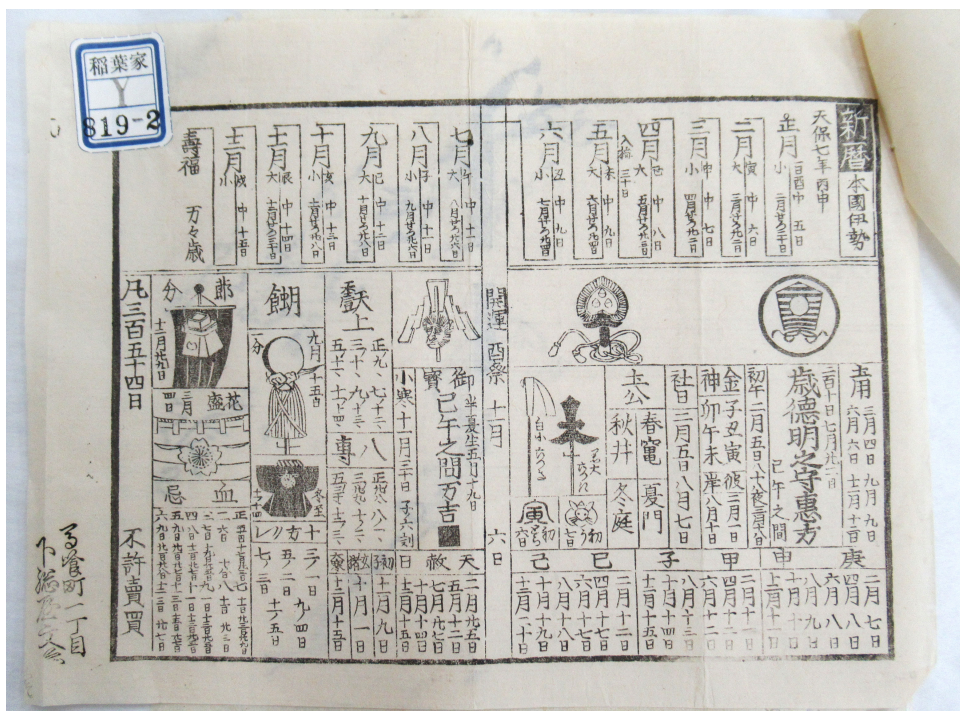


写真1 (天保7年)「新暦」(稲葉家文書Y819-2)

欄外に「のし 御とし玉」「馬喰町壱丁目下総屋文蔵」とある。これもおそらくは年始の挨拶として下総屋文蔵から得意先に届けられたものである。公事宿が村々の得意先に随時情報を提示していたことがうかがえる。

下総屋は稲葉家に、いわゆる「年齢早見表」も渡している（写真2）<sup>(12)</sup>。これは明和五年（一七六八）以降、各年に該当する年齢を一覧にしたものである。明和五年の部分には「八十四」（歳）とある。このような表に需要があったのだろう。こちらも欄外右下に「馬喰町壱丁目下総屋文蔵」とある。また、この年齢早見表は馬喰町二丁目の御印判師森田與七が製作したものであることがわかるが、前述したように印判師森田與七は下総屋を通じて稲葉家の印判を製作していることも確認できるから、馬喰町の商人同士のつながりも想定されよう。下総屋文蔵と稲葉家の関係では次の史料4も興味深い。稲葉儀右衛門から子の吉左衛門への手紙である。

〔史料4〕

「加養村

稲葉吉左衛門様

午后

下文方

同儀右衛門

寒冷ニ罷成候得とも弥々家内老人衆御障無御座珍重候奉存候、  
（中略）

一下総や文蔵方普請之儀ハ如何ニ取極り候哉、取極り次第都て成とも一寸之遣可被成候、色々之取沙汰ニ御座候間、同人儀も苦

勞ニ致故之様子之儀、急々之遣申可上候（後略）  
十月一日<sup>(13)</sup>

嘉永四年正月

子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
火	土	金	木	水	金	土	火	木	水	土	金
八	七	六	五	四	三	二	一	二	三	四	五
九	八	七	六	五	四	三	二	一	二	三	四
十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	二	三
十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	二
十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二
十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三
十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四
十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五
十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六
十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七
十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八
二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九
二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十
二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一
二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二
二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三
二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四
二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五
二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六
二十八	二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七
二十九	二十八	二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八
三十	二十九	二十八	二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九

御印判師 馬喰町二丁目 森田與七

写真2 嘉永4年正月「(年齢早見表)」(茨城県立歴史館所蔵 稲葉家文書 3-1006)

表書き部分に「下文方」とあるのは下総屋文蔵方にいる、ということであろうか。文中では、下総屋文蔵方での普請についてどのように決まったのか問い合わせをしている。「同人儀も苦勞ニ致故之様子之儀、急々之遣申可上候」とあり、文蔵も苦勞しているようなので急ぎ聞くものであると記されている。稲葉家にとって日常生活においても重要な存在といえる下総屋に対して、普請の手伝いあるいは金銭の助力をするといったことであろうか。

一方で、下総屋も稲葉家とのつながりを重視する内容の手紙を送っている。

#### 〔史料5〕

重左衛門様御帰村ニ付啓上仕候、向寒之御弥御安静被遊御座、珍重御儀奉存候、下拙家内無異義罷在候間、乍憚御安意思召可被下候、然者私一件先般申上候通、去ル十一日御呼出ニ而無届も他行仕候段不埒ニ付、過料錢三貫文被仰付、家業之御用是迄通可致旨、別段被仰渡落着仕候所、此段御承知可被下候、先ハ右之趣申上度早々如此ニ御座候、以上

十一月十四日

下総屋文蔵

稲葉吉左衛門様

同 文太様

尚々御家内様江も宜敷御伝言奉願上候、以上<sup>(1)</sup>

下総屋文蔵が届なく他行をしたことで、支配役所から叱りを受けたようである。そのため、罰金となる過料錢三貫文を支払うことになった。しかしながら家業すなわち公事宿としての業務には問題ない旨を稲葉家に知らせている(傍線部)。得意先からの仕事を請け負えなく

なることを避けるために、引き続いての「最戻」を意識した早々の連絡であったのだろう。

#### おわりに

本稿は近世社会において支配と村をつなぐ重要な役割を果たした公事宿について、百姓の日常にも関わる史料と合わせて紹介した。公事宿が家の個々人ともつながりを持っていたようすを読み取ることが可能である一方で、このつながりが個別のものであるのか、あるいは村や地域全体の流通等に関わるものとなり得るのかといった点での公事宿の存在意義については今後の検討課題としたい。

また、本稿で取り上げた嘉永期の名主役をめぐる争論については、小前百姓からの持高名主の存在否定という意識の形成、そして村の負担を論じる組頭層の意識にも関わり、近世後期の村の自治についての問題を含んでいると考えられる。詳細は別稿にて改めて分析することにした。

(茨城大学教育学部社会科学教育教室 令和4年8月31日受理)

#### 注

- (1) 稲葉家文書は約九、〇〇〇点の史料群である(『茨城大学附属図書館所蔵稲葉家文書目録』(二) )(五)、茨城大学附属図書館、一九八四～一九八八年)。なお茨城県立歴史館には約一二、〇〇〇点の稲葉家文書が所蔵されている。
- (2) 千葉真由美「江戸の印判師と印の流通―下総国・常陸国の村々の事例から―」(『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学・芸術)』第六九号、二〇二〇年)。



- (3) 『市中取締類集』（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- (4) 瀧川政次郎『公事師・公事宿の研究』（赤坂書院、一九八四年）、南和男「江戸の公事宿」、『国学院雑誌』六八一～二、一九六七年。
- (5) 嘉永四年三月「御用留」（茨城大学図書館所蔵稲葉家文書K三二）。以下、茨城大学図書館所蔵稲葉家文書は「稲葉家文書」と表記する。
- (6) 同右。
- (7) 子（嘉永五年）十一月五日「乍恐以書付奉申上候」（稲葉家文書S三九―二）。
- (8) 子（嘉永五年）「虎之助呼出し吟味一件につき取調様子報告」（稲葉家文書S二七―四）。
- (9) （年未詳）十一月二七日「書状、衣服注文品のこと」（稲葉家文書Y八四九）。
- (10) （天保七年）「新曆」（稲葉家文書Y八一―二）。
- (11) 嘉永六年「（三奉行等職員録）」（茨城県立歴史館所蔵稲葉家文書3―一〇〇四）。
- (12) 嘉永四年正月「（年齢早見表）」（茨城県立歴史館所蔵稲葉家文書3―一〇〇六）。
- (13) 年未詳一〇月一日「（書状、下総屋文蔵方普請之事）」（茨城県立歴史館所蔵稲葉家文書2―二六五〇）。
- (14) 年未詳「（私一件無届他行のため過料被仰付につき）」（茨城県立歴史館所蔵稲葉家文書3―一一四四）。